

コミュニケーションと言語教育の問題

The Problems of Communication and Language Education

趙 顕 龍*

1. コミュニケーションとは何か？

私たちはなぜ言語を勉強するのか？私たちはなぜ外国語を勉強するのか？言語は基本的にコミュニケーションを目的とする。言語を道具的な観点から見ると、コミュニケーションの道具というのが正しいアプローチであろう。外国語を勉強する立場ならばなおのこと、コミュニケーションの道具という言葉がより近いだろう。ところで言語をコミュニケーションの道具だとすると、いくつかの問題と先入観が生じるようである。まず言語だけがコミュニケーションの道具であるかのように考えることである。もちろん言語がコミュニケーションの道具であることは正しいが、言語以前の世界に対する理解が先行しなければならない。私たちは言葉で表現しなくても通じることがある。場合によっては、かえって言葉がコミュニケーションの妨害要素になったりもする。文章も似た問題を含んでいる。場合によっては文盲が問題でなく、文章が分かることがかえって問題でもある。どのような場合に言語がコミュニケーションの妨害要素になるだろうか？そして真のコミュニケーションとは何だろうか？言語教育からコミュニケーションの概念をどのようにとらえるべきか？私たちは言語教育からコミュニケーション的接近法を論じる以前に、コミュニケーションの概念に対して明確にする必要がある。本稿ではこのようなコミュニケーションの概念に関する基本的な問題について、言語、コミュニケーションに関連した韓国語表現を中心に述べたい。

2. コミュニケーションと順理（当然な道理）の問題

私たちは簡単に対話の相手との間の、伝えようとする意味が通じる場合にコミュニケーションができたという。だが、私たちは話者と聴者との間で意味が通じて、直ちに「言葉が通じない」という表現を使ったりもする。すなわち、真のコミュニケーションは単純に意味が通じることとは違うように判断しているのである。本稿ではいくつかのたとえ話を交えて、真のコミュニケーションについて考えてみることにする。

言語学を勉強する人々ならば聖書のいくつかのフレーズは数えきれない程聞くことになる。西洋の言語学が主をなしているためともいえるが、言語学概論の本を見ても主に聖書の話がたくさんある。とくに「はじめに言葉ありき」という一節は言語の重要性を述べたもので、「バベルの塔」の物語は言語の分化に関する話で、「五旬節」の物語は言語のコミュニケーションに関する話として記述されているものが見られる。聖書に出てくるバベルの塔と五旬節の物語はそれぞれ異なるものの、一つの共通点を有している。それはまさにコミュニケーションに関する問題であ

* Cho, Hyun Yong 慶熙大学校 国際教育院 教授

る。正確には言語、外国語の問題とすることができる。本稿で述べようとするのは当然宗教の話でなく、コミュニケーションに関する話であることを明らかにしておきたい。

バベルの塔の物語は数えきれない程聞かされた話であろう。人々が天に届こうとする欲からバベルの塔を積むとすぐに神様が塔を崩して言語を分けたという話である。その結果として、現在のように言語が分けられたという物語である。今のように多くの言語が発生することになった原因を説明している。宗教では事実と信じ、科学ではとんでもない話として扱うこともある。宗教と科学の論争は物語が示している所をたびたび避けている。月を見ないで月を示す指を見ているということである。月を見なければ、コミュニケーションにも深刻な問題の原因になる。月を見ればすぐコミュニケーションができて共感されるはずなのに、指を見て互いに立場を強調するためである。自身が見た指の形と方向を強調しているだけでは、真のコミュニケーションが実現できなくなる。

著者は、バベルの塔の物語の核心はコミュニケーションができなくなった原因を調べなければならないことだとする意見に同意する。コミュニケーションは共感を土台にする。お互いの考えが異なるところに触れているならばコミュニケーションにはならない。それはただ外国語を使ったからではなく、同じ言語を使っても同様である。同じ言語を使う人でも「話が通じない」と言うのは、お互いの共感が成り立たなかったためである。「なぜ私の話がわからないのか？」と不平をいうが、これまたコミュニケーションが単純な意味把握の問題でないことを示している。同じ言語を使っても、あたかもそれぞれ違う言語を使う人々のように理解できなくなるのである。聖書における共感は「神の御言葉」どおりであろう。「天のご意志」のままに生きるならば、すなわち道理に従って生きるならば共感は容易である。当然な道理に逆らって、自身の利益だけを得ようとするれば当然共感は消えて、言葉が通じない状態になるだろう。そのような人々は一緒にいることはできない。一時も一緒にいたくないのが当然だろう。だからお互いを罵り、ちりぢりに散ることになる。バベルの塔の結末はちりぢりに散る人々の姿である。真のコミュニケーションが行き詰まってしまった結果は断絶であり、分散である。道理に従って生き、お互いを理解しようと努力するならばコミュニケーションは容易だろう。コミュニケーションには順理（当然な道理）と理解が土台を形成する。

五旬節の物語は正反対のアプローチだ。キリスト教徒でなければ、なじみのない話でもあるだろう。イエスの御言葉を伝えようとする人々の間に奇跡が起こることになるが、その奇跡は他の地域から来た人々にも、福音がよどみなく伝えられる場面である。すなわち言語が他の人にもコミュニケーションの手段となったのである。この場面も宗教と科学は立場が違おうだろう。ありえることかどうかに関心事であろう。だが、この場面で私たちは、自分はなぜコミュニケーションできたかに関心を傾けなければならない。バベルの塔の場合を考えてみれば答えが出てくる。神様の御言葉のとおり、道理に従って生きる人々は言語を超越することになる。言語が違うからといってコミュニケーションが成り立たないわけではないということである。私たちは数多くの経験を通じて知っている。互いに言語は違うが、伝えようと思う言葉の内容に共感するならば、コミュニケーションは実現する。外国語教育でコミュニケーションをするというとき、どこに焦点を合わせなければならないのかを示す話とすることができる。事実、場合によっては話をしなくてもコミュニケーションができる。「話さなくても分かる」という表現は真の意味のコミュニケーションを示す。この話を通じて、コミュニケーションは関心と共感を土台とすることができる。

3. コミュニケーションと関心

外国語教育でコミュニケーションが重要なのは単純な意味だけの問題ではない。研究者は外国語教育において、流暢さを語り、正確性を語る。しかし流暢さでも正確性でも解決できない問題がまさにコミュニケーションである。それはコミュニケーションが相互理解、そして共感を土台とするためである。コミュニケーションを語る前に、お互いに対する理解が優先されるのは、まさにこのためである。言語教育において文化教育が重要な理由もここにある。文化教育はコミュニケーションの障害物を片づける役割をする。文化を理解するのはお互いの間に橋をかけて、ドアを開けることだ。本当にコミュニケーションをしたいなら順理(当然な道理)を考えるべきで、相手方と共感しようとする努力が優先されなければならない。

コミュニケーションは言葉のみで行なうものではない。まず心によるコミュニケーションが重要である。心によるコミュニケーションを理解するためには、ことば以前のコミュニケーションを考えなければならない。よって、状況やコミュニケーションの環境を理解しなければならず、文化間のコミュニケーションを理解しなければならない。心とことばに対するコミュニケーションを理解した後は、書き言葉によるコミュニケーションも熟考しなければならないだろう。書き言葉が生じた原因も熟考し、書き言葉の危険性も熟考し、書き言葉の必要性も考えてみなければならないだろう。コミュニケーションに対する理解はこのようにさまざまな段階を経て、かたちを整えていくことになるだろう。

また、コミュニケーションは双方向的である。一方向でないという事実は様々な考えの必要性を示す。相手がいることで、相手に対する理解と相手に対する自身の態度を考えることになる。自身の考えを他人に貫徹させることをコミュニケーションだと語る傾向もある。自身の考えをひたすら語ることで、コミュニケーションがうまくいったとしたりもする。だが、コミュニケーションには相手方の意見も重要である。話者はコミュニケーションができたと考えたが、聴者はそのように考えなかったかも知れない。かえって聴者はコミュニケーションの壁を感じていたかも知れない。だから、コミュニケーションは難しいのである。同じ言語を使う仲でも、親しい間柄でも、さらに夫婦や親子間においても、コミュニケーションは容易ではない。ましてや他の言語を使って、他の文化の中で生きてきた人々間のコミュニケーションは、より一層苦勞せざるを得ない。外国語を教えるという事は、コミュニケーションという側面から見れば、多様な問題を示している。

だが、コミュニケーションにならないということが問題点ばかりではない。人間同士のコミュニケーションの問題を検討すると、かえって新しい世界に出会うこともあるからだ。普通私たちは、言語が一つの世界を現わすという。一人一人の言語も世界を含んでいる要素があるが、ある集団の言語は明確に世界を見る観点が含まれている。相対主義的な文化の観点は、言語により世界を見る観点が違うことを説明している。言語の特徴がその言語を使う人々の思考パターンを示したりもする。そのような意味から見れば、言語を教えることは興味深いことになる。したがって教師や学生すべての新しい世界を発見する喜びを感じるように、教育課程を構成することも大変重要である。このような意味から見ると、コミュニケーションの概念を熟考してみるのは言語教育の観点を「新しい世界とコミュニケーション」へと広げる出発点となり得る。

4. ことば以前のコミュニケーション

私たちは言語教育をするとき、ことば以前のコミュニケーションに対しても関心がなければならぬ。二人のインディアンの老人に関するたとえ話は、ことば以前の世界に対する理解を助けてくれる。互いに言語が違う二人のインディアンの老人が夕焼けを眺めて座っていた。過ぎ行く人がことばも通じないのに何がおもしろいのかと尋ねた。だが、二人の老人は多くのことばを交わしていると答える。事実二人の老人が話をしたのかしなかったのかは重要ではないだろう。どんな言語で話したのかとも心配する必要はない。だが、二人の老人の間には多くのコミュニケーションがあっただろう。もしかしたら二人の老人は真の意味のコミュニケーションをしていると言えるかもしれない。

1) 高文脈と低文脈社会のコミュニケーション

私たちは文化で社会を分類するとき、高文脈 (high context) 社会と低文脈 (low context) 社会に区分することがある。周辺の状況をとっても重要だと考える社会を高文脈社会とする。普通は伝統社会が高文脈社会である場合が多く、東洋社会が高文脈社会である場合が多い。主に言語外的なものがコミュニケーションに役に立つ社会を高文脈社会だとしても、それほど間違いではないだろう。外国の学者によれば、日本はとても高文脈な社会だという。ところで韓国をよく知る日本の学者や西洋の学者は、むしろ韓国がさらに高文脈な社会だという。言語教育の立場から見ても、韓国語は高文脈社会の様相をたくさん示している。韓国も急速に社会が変わっているので、高文脈社会から低文脈社会に変貌する様相を示してはいるが、相変わらず高文脈コミュニケーションになじむ側面がある。高文脈コミュニケーションは関心が重要なコミュニケーションの方法である。韓国語式の表現を使えば、「表情」ということもできる。語用論的な立場から見れば韓国語はかなり難しい言語でありうる。なぜなら状況によって理解が異なる場合が多いためである。

韓国語の対話ではつねに状況が重要なので、相手に対して関心を持っていなければならない。主語の省略もこのような観点で説明することができる。咳払い文化も高文脈文化と考えることができる。言葉で説明するより、ある時は咳払いが正確な表現になることがある。時間観念も高文脈なのか低文脈なのかによって変わることがありうる。高文脈は相互間の脈絡に対する理解を前提とするのである。よって、高文脈社会の人と低文脈社会の人との間には多くの誤解が発生することになる。

先に例示した二人のインディアンの老人の話も高文脈の観点から見れば簡単に理解することができる。あえて話をする必要もなかっただろう。また、各自の言葉で話をして大きな問題がなかっただろう。表情だけ見ても理解できたかも知れない。場合によっては話をしなくてもお互いを理解するのに大きな問題がない。外国語ができない老人たちがそのまま韓国語で外国人に話す場合がときどきある。それでも外国人は意味をうまく識別する場合が多い。コミュニケーションが成り立ったのである。もちろん場合によっては身振り、手振り、すなわち身体言語も使う。「手振り、足振り、身振り、目くばせ」は全部重要なコミュニケーションの方法である。言語があまり通じないほど身体言語を通したコミュニケーションが効果的である。したがってコミュニケーションについて論じるときは、ことば以前のコミュニケーションに対する考慮が必要である。

2) コミュニケーションを妨げる「ことば」

「ことば (말 [mal])」で表現することがかえってコミュニケーションを妨げる場合が多い。韓国の人々はコミュニケーションを妨げる言葉を「おと (소리 [sori]: 日本語では「音」「声」などに翻訳される一訳注)」と表現したりする。韓国語で「ことば」と「おと」の差異点を簡単に考えてみると、「人が意味を伝達するためにするもの」はことばであり、「自然で聞こえるもの」はおとであろう。例えば「声 (おと) が良い」という表現は言葉の意味が良いということではなく、ただ音声が良いという意だ。「風の音、鳴き声 (おと)、虫音」のようにである。ところで韓国語には人の話を「ことば」といわないで、「おと」という場合がある。これは「ことば」が意味を伝達する媒介体と見なさず、ただ耳に鳴る音としてのみ考えるという意味である。コミュニケーションにならないということを意味するのである。

韓国語で「ことば」という表現の代わりに「おと」という表現が使われた語彙を調べれば韓国の人々が考えるコミュニケーションの重要性について知ることができる。例えば「小言 (잔소리 [jan-sori])」は「ことば」でなく、ただの「おと」である。コミュニケーションにならないのである。話者は自分の話の中に教訓を含んでいると考えるが、聴者の立場ではコミュニケーションにならない、ただの「おと」である。「ムダ口 (군소리 [gun-sori])」もコミュニケーションには役に立たない言葉だ。無駄な言葉による、ただの言い訳や弁解である。この他にも「ひと声 (한소리 [han-sori])、大口 (큰소리 [kwun-sori])、たわごと (헛소리 [heot-sori])、ほら吹き (훗소리 [hwin-sori])」等は、コミュニケーションがまともに成り立たないことを意味する表現である。

韓国人のコミュニケーションでは「ことば」なのか、「おと」なのか、熟考しなければならない。コミュニケーションは二人でするもので、互いに聞こうとするときに意味がある。気が合っただけでこそコミュニケーションが成り立つ。韓国語に「ことばを同じ声 (おと) にしろ」という表現があるが、これも、話す者は「ことば」と考えるが、聞く者は「おと」と考えているのである。「ことばになる話をしろ」という言葉も同じ観点で考えてみるができる。「ことば」と「おと」の意味が明確な表現といえる。韓国人が考える真のコミュニケーションの意味を示す表現だ。

3) 言葉で表現しにくいコミュニケーション

私たちはコミュニケーションで言葉が最も重要だと考える傾向がある。ところで韓国人は基本的に言葉を不確かなコミュニケーションと考えている。これについての証拠は言葉に関連した表現の中から探すことができる。韓国語の多様な表現が、心を伝えるには言葉だけでは足りないことを示している。「それを言葉にしなければ分からないのか？」という表現は、言葉が副次的な手段であることを示している。次元が高いコミュニケーションは言葉を必要としないと考えられる。言葉にしなくても分かりうる段階がコミュニケーションの高い段階、あるいは自然な段階である。韓国人に言葉で表現する能力が足りないと言われる場合があるが、これは韓国人のコミュニケーションに対する観点が理解できないために起きる現象である。韓国人は基本的に言葉に対する信頼が高くない。「口ばかり達者である (말만 번지르르 하다)」という表現でも「口から先に生まれる (빈 수레가 요란하다)」という表現は言葉が上手だからといって、心が伝えられるものではないというコミュニケーションの観点を示している。

韓国語では人をほめるとき、「その人は言葉が必要ない」と表現する。言葉で説明する必要がないこと、見た目でも何かも分かる人が立派だという考えを含む表現である。物や景色の場合にも、最も良い称賛は「どんな言葉でも表現できない」である。悪いものを表現する時も韓国語で

は「お話にならない(「말도 못한다」、「말이 아니다」)」という表現を使う。感情を表現する時も韓国語では「語り尽くすことができない(말로는 다할 수 없다)」と表現する。また、実際の行為でも「二の句が継げない(말을 잇지 못하는)」場合が多い。韓国では感情が極限にあれば「言葉を失う」という表現を使う。残念なことが発生した時も「弁明のしようがない(할 말이 없다)」という表現を使う。

このように韓国人の言語生活を調べれば、言葉をそれほど信頼していないということがわかる。したがって言語表現よりは相手側の心を理解することが重要なのである。話をしないでコミュニケーションをするために最も重要なのはまさに「関心」である。よって、韓国語で互いによく通じる人を「以心伝心(「척하면 척」인 사이)」の間柄だという。非言語的なコミュニケーションとの関係もあるが、目だけ見ても何を考えているのか分かる。「表情」という単語も、目つきだけ見ても分かることを示している。先に言及したように、高文脈社会では互いに状況がよく分かるので関心も深く、理解も早い。互いに「家にスプーンがいくつあるか知っている」という表現は、お互いの状況に対する理解の深さを意味する。高文脈な社会の姿を示す表現といえる。高文脈社会を現わす韓国語表現で「注視する(눈여겨보다)」という言葉もある。注視するとは目(눈)で考えることである。関心を意味する表現といえる。すなわち、韓国人にとってコミュニケーションの基本は関心である。ことばや書き言葉、身振りはその次に必要なものだ。韓国人には、ことば以前に気持ちでコミュニケーションすることが何よりも重要である。

5. 非音声コミュニケーション

私たちは気持ちを伝えるのが難しい状況になると、身振り手振りを尽くして説明するという表現を使う。コミュニケーションの重要な方法に手や足があるということである。もちろん身振りもあり、目くばせもある。他の人が気づかないようにしたいときは、主に目くばせをする。西洋ではウインクというが、2人だけが共有する秘密の感じもある。

非音声コミュニケーションは言葉と関連していろいろと機能している。おもに音声言語のコミュニケーションの内容を補充、強調する機能と音声言語のコミュニケーションに代替する機能を主とする。本稿で主に言及するのは代替の機能である。実際には、代替の機能という用語も正確な使い方ではないかもしれない。音声言語を基本的なコミュニケーションからみるときだけ、代替の概念が成立するためである。したがって場合によっては音声言語が代替の機能を担うということかも知れない。

一般的にコミュニケーションの70%以上が非音声コミュニケーションであるという。言語以前に心で行なうコミュニケーションが重要であると先に言及したが、心をすべて理解するのは容易なことでない。したがって非音声的信号を活用してコミュニケーションをするのもとても重要である。とくに外国語でコミュニケーションをしなければならない状況において、非音声コミュニケーションの役割は非常に大きいと言える。外国人と言葉が通じず、「身振り手振りする」というのは、非音声コミュニケーションの重要性を示す表現であるといえる。

同じ言語文化圏といっても非言語的信号をよく理解することが重要である。非音声コミュニケーションも練習が必要なのも、このような理由のためである。韓国人の間にも「脇腹を突かれて礼をする」のように、さらに直接的な非音声的行為が必要な場合も発生する。

文化間コミュニケーションでは非音声コミュニケーションを理解することができなければさらに大きな問題となる。これは音声言語と同じように文化圏により非音声的表現が違ってコミュニ

ケーションの妨げになりうるためである。とくに同じ行為なのに文化圏により意味が違う場合には、コミュニケーションにならないだけでなく誤解が発生する問題もある。

6. 言葉とコミュニケーション

私たちが普通コミュニケーション式アプローチとして、言葉によるコミュニケーションというときに見逃す部分がある。それは言葉で成り立つ行為を全部コミュニケーションだと考えることである。だが言葉で行なうコミュニケーションがなぜ必要なのか、言葉で行なうコミュニケーションの役割と限界は何かに対しても、よく考えてみなければならない。まず韓国語では非音声行為でコミュニケーションをすることに対する問題点を表現する場合がある。「言葉でしろ（口で言え）」が代表的な表現だ。言葉ですするという表現は「暴力的行為」に対する問題点を指摘するものである。すなわち、言葉にしなかったとき発生しうる誤解の問題を指摘したものであることができる。ことば以前のコミュニケーションや非音声コミュニケーションが互いに関心がある相手には役立つが、そうではない場合にはコミュニケーションに問題が生じることもありうる。

また、音声で行なうコミュニケーションの場合には、内容と表現方法が大変重要である。言語教育、外国語教育でもこのような観点を堅持していなければならない。代表的な韓国語表現では「言葉ならみな言葉だと思うか?」というフレーズがある。言葉のうちには言葉だとすることができない言葉もあるという意味だ。「それを言葉だというのか?」、「言葉らしくしたらどうか?」というフレーズも表現の重要性を現わしている。よって「言葉である言葉、言葉らしい言葉」を使わねばならないのである。したがって言葉は相手方の境遇を考慮した言葉であるべきで、関心を持って使わなければならないのである。自分の主張ばかり強い場合には「言葉が通じない人」になる。互いに腹が立った場合にも、言葉をうまく表現するならば「言葉ひとつで千両の借金を返す」状況になり得る。

また、韓国人は言葉の威力に対して高く評価して恐れることもある。「多くの人の口が鉄を溶かす」という表現は言葉の力を表現するもので、「言葉が種になる」という表現は言葉に対する恐れを表している。「イプチャンソリ（입찬소리：自身の地位や能力を信じ、自信過剰に話すこと）」という表現も言葉の重要性を現わす。「イプチャンソリ」という語彙にも「おと（소리 [sori]）」という言葉が入っているが、これは「言葉」と考えないという意味が含まれている。すなわちコミュニケーションの重要な道具ではないのだ。韓国語で「口に暖かい言葉」は、肯定の言語が重要であるという考えを示す表現といえる。言語教育では単純なコミュニケーションの次元を越えて肯定的な話し方などの表現に焦点を合わせた教育も必要である。

7. 書き言葉とコミュニケーション

私たちは文字がなかった時期に問題があり、文字がある時代に問題が解決されたかのように考える傾向がある。これは文字教育の正当性を語る根拠として作用する。だが、文字教育より前に、私たちは文字の必要性に対する基本的な熟考がなければならない。例えば韓国人は世宗大王がハングルを創り出したことを誇らしいと考える。愚かな民をかわいそうに思ってハングルという、習いやすく書きやすい字をお作りになったことにとっても感謝している。だが、世宗大王がハングルを作ったことについて、当時の民衆も歓迎したかどうかについては考えて見る必要がある。民衆には、書き言葉の必要性があまりなかったといえるからである。昔の人々にとって、字が分からないことが問題であれば、解放前まで文盲率が非常に高かったというのは理解し難いことであ

る。解放以後に南北朝鮮ともに一番重点を置いた分野の一つが文盲退治だったという点も、文盲が蔓延していたことを示している。書き言葉によるコミュニケーションは、話し言葉によるコミュニケーションに比べて必要性が非常に低い。国語教育でも文章を書くことを強調するが、実際に文章を書くことは少ない。韓国語教育のような第2言語教育でも、文章を書くことが必要な状況が多いということはない。

文章を書く教育は、書き言葉が果たして必要かということに対する熟考から始まらなければならない。学生たちに文章を書くのが非常に重要であると語るが、本来文章を書く職業を持つ人々を除き、多くの成人は文章を書かない。とくに外国語学習者のなかで、外国語で文章を書くことはそれほど多くない。したがってどんな文章を書くのが学習者に必要なのかに対して、まず調査が必要であろう。もちろん学問目的の学習者に書き言葉の教育は重要な部分であろう。レポートを作成して、論文を書かなければならないなど書き言葉の必要性が高いためである。だが、すべての韓国語学習者にとって、書き言葉の教育の必要性が高いわけではない。

文章を書くことができない学習者は文章を書く必要がない学習者でもある。文章を書くのがとても必要な場合ならば、学習動機が明らかにならずである。韓国語教育の例を見れば、在外同胞学習者と外国人労働者の場合に「文章を書く能力」が不足していると言われる。だが、学習者の立場から韓国語の文章を書くことが果たして重要だと考えているか、疑問である。必要性が低いので学習動機が低く、学習動機が低いので達成度もやはり低いということはあるだろう。

コミュニケーションのための書き言葉の種類についても熟考が必要だ。私たちは論文やレポート、説明文のような文語体の文を書くことを重要視するが、実際にはEメールのように読者が明らかな口語体的な文章を書くことがさらに必要な場合も多い。したがって学習者がどんな文章を書く必要があるのかということについて、調査と研究が必要であろう。また、口語体を書くことと、文語体を書くことの差異点に対する研究も必要である。とくに韓国語は口語体と文語体が全く違う言語である。韓国語の文章を書くのが難しい理由も口語と文語の差が大きいという点に起因しているとも言える。先に言及したように、学習者がEメールのような口語体の文章を書くことが必要ならば、これに関する研究がより一層必要な時期であるといえる。また文章を書くことの倫理が問題になって強調される現在の状況を見ると、文章を書くことに対する真剣な研究と教育が必要だろう。

8. おわりに

コミュニケーションは言語教育で最も重要な目標だ。だが、言語教育では言語以前のコミュニケーションに対しても関心を持たなければならない。ことば以前のコミュニケーションは文化教育の側面からも重要度が高いと言える。文化教育は相手に対する理解に役に立つ。また、言語以前のコミュニケーションでは非音声コミュニケーションが挙げられる。身体言語は言語に代替する場合に教育の効用性が高く、補充、強調する場合にも効用性がある。音声言語と文字言語の場合にも単純なコミュニケーションでなく、真のコミュニケーションのための教育が必要だといえる。とくに文字教育の場合には、果たして言語教育で文字教育のコミュニケーションが必要なのかに対する根本的な熟考が要求される。今後言語教育ではこのようなコミュニケーションの特徴を教育課程に反映しなければならないだろう。